

信濃教育

巻頭言

「ほめられるって気持ちいいですね」

中学校の美術の授業を参観したときのことである。デッサンの授業だった。何を描いていたのかはよく覚えていない。二十年も前のことである。生徒は集中してデッサンしている。先生が机間指導をしている。先生は一人ひとりの生徒に声をかけていくのだが、私はあることに気づいて驚いた。生徒一人ひとりに声をかけていく先生の言葉がみな違うのである。この先生はいったいいくつのほめ言葉をポケットに入れているのだろうか。そう思ったとき、私の持っているほめ言葉のあまりの少なさに、恥ずかしくなったことを覚えている。

小学校の低学年では、先生や友だちとのトラブルが多く、教室で落ち着いて学習することができない子がいた。その子と中学二年生になった時に再会した。先生たちを悩ませるさまざまな課題が解決したわけではないが、何よりも教室で他の子たちと一緒に学習できている事実、私はその子の成長を感じ、「○○さん、成長したなあ」といつもほめていた。

ある日の放課後、その生徒が校長室にやってきて、こう言った。
「校長先生、僕は本当に成長しましたか」

私は、小学校の時よりも成長したと思うことを、具体的にいくつかあげて

「○○さんは、こんなに成長しているんだよ」

と言った。その子は何度も「本当ですか」と聞き返し、最後にこう言って帰っていった。

「校長先生、ほめられるって気持ちいいですね」

ほめられて悪くなる子はいない。ほめるということはその子を認めることである。子どもが（子どもに限らないが）自分をダメだと思うのは、否定されたときである。

それにしても、あの美術の先生のように、子どもをほめる言葉をポケットにいっぱい持っている先生になりたかったが、そう思ったまま退職してしまった。